

「上海ネットワーク」をめぐる国際流通論議とその評価

—— 古田・高村両教授の見解に学ぶ ——

内 田 寛 樹

論文の構成

はじめに

- 1、 古田教授の見解
- 2、 高村教授の見解
- 3、 評価と課題

おわりに

はじめに

「上海ネットワーク」という概念は、近年盛んな「アジア交易圏」の研究の中で、19世紀後半に東アジアの交易の中心として重要な役割を担った上海に焦点を当て、上海を中心とする東アジアの流通ネットワークを明らかにしようとするものである。この論文では、まず「アジア交易圏」研究の一翼を担い、上海ネットワークの中の神戸貿易にスポットを当てた古田和子教授の『上海ネットワークと近代東アジア』（東京大学出版会、2000年）の第1章及び第3章、第4章を中心に検討を行う。さらに高村直助教授が『明治経済史再考』（ミネルヴァ書房、2006年）において神戸貿易が中国商人によって掌握されていたという古田氏のイメージに

してコメントした点に注目する。最後にわれわれはこれらの論評から何を学ぶことができるか整理し、今後の研究課題を明らかにすることを試みたい。

1、古田教授の見解

（1）近年盛んな「アジア交易圏」研究において、「流通ネットワーク」の領域における研究には、まずアジア域内の経済ネットワークについての総合的な理論化をはかることを意図した重要な先行研究がいくつかある。そのひとつに「ネットワーク」という視点から近代アジア諸地域における商業ネットワークの機能と実態を、実証的なケース・スタディを通して歴史的に解明することを目指した先行研究として杉山

伸也・リンダ・グローブ編『近代アジアの流通ネットワーク』(創文社、1999年)をあげることができる。また、石井寛治『近代日本とイギリス資本——ジャーディン・マセソン商会の研究を中心に』(東京大学出版会、1984年)では、「商業貴族」と称されるジャーディン・マセソン商会の日本での活動から、イギリスによる自国商品の市場拡大がどのような形で行われたかが詳細に述べられている。さらに、石井寛治・関口尚志編『世界市場と幕末開港』(東京大学出版会、1982年)では、何がイギリス(資本主義)を東アジアに導いたか、またこの過程で何がイギリス(資本主義)にとって必要であったのかを明らかにしている。また、19世紀後半以降、1866年恐慌後のジャーディン・マセソン商会の活動を取り上げ、この時期の中国におけるイギリス資本の存在形態を明らかにするとともに、現地資本と本国資本との対立・結合の問題について具体的に述べた石井麻耶子「19世紀後半の中国におけるイギリス資本の活動」(『社会経済史学』45 4、1979年)なども当該期の中国の開港場における外国資本の動きに注目した秀作である。そして当時最大の貿易金融機関であった香港上海銀行について、また1870年代の交通通信革命と英国の行うアジア貿易への影響について論じた西村閑也「香港上海銀行 1870-1913」(『金融構造研究』29、2007年)も、イギリス本国から東アジアへ製品の直輸入が増加する19世紀後半を金融面で知る上で参考になる論文である。また、本稿がとりあげる古田氏の著作に関しては、活発な論議が近年なされており、その中のいくつかをあげると、松野周治や城山智子、四方田雅史などの『上海ネットワークと近代東アジア』書評などが印象的である。これらの先行研究をベースとしながら、本稿では古

田教授と高村教授の見解を中心に上海ネットワークをめぐる論議とその評価を行いたい。

(2) 古田氏は第1章「上海ネットワークと神戸」の中で、1870年代の神戸を東アジア交易圏の中に位置づける作業を行い、主として上海において週刊で発行されていた The North China Herald を資料として使用し、分析の視点を上海に置いている点が特徴的である。そして最近の以下のような研究成果をふまえながら、日本における中国商人の活動をアジアの商業ネットワークのなかに的確に位置づける試みを展開する。

在日華僑研究で、日本の中の華僑社会の史的、社会構造論的分析に重点を置いた研究¹⁾、そして「ヨーロッパの negative としてのアジアでなく、アジアの 'positive history' を書こうとする」²⁾ 浜下武志らの一連の研究における中国商人の捉え方、つまりアジアの 'positive history' における主体としての中国商人の研究³⁾、また 居留地貿易制度・代理店制度の非効率性に悩む欧米外商にとって、豊富な在庫を長期間維持する中国商人は、日本貿易において欧米外商にとっての強力なライバルであったとする杉山伸也の議論⁴⁾、最後に 日本の開港は西欧への開港であったと同時に、アジアへの開港でもあったという議論を踏まえながら、アジアからの「衝撃」の担い手として日本における中国人貿易商に注目する籠谷直人らの研究など⁵⁾がそれである。

古田氏はこれらの諸研究について日本における中国商人を「アジア交易圏」という上位システムの中で大局的に捉えなおす視点を提供したと高く評価しているのであるが、しかし「アジア交易圏」の中で彼らが実際どのような地位を

占めていたのか、あるいはもっと単純に本拠地としての中国における商業活動とどのように連携し、どのように活動していたのか、という実態はほとんど明らかにされていないとし、この章で上海から神戸を向いて明治初期の開港場を眺めることにした、と書いている。そして、その場合上海を中心に放射線状に延びている何本かの線が広がっており、そういう視点で見た場合、神戸がその放射線のひとつを形成していることに気付くとしたうえで、つぎのような問題を提起される(図1 - 1)。すなわちこの古田氏の著作の第1章の論点となる中国商人が上海の外国製綿布を続々と神戸に運ぶ「アジアの海」を、われわれはどのように評価すべきなのか、という問題提起がそれである。

1868年1月に神戸が開港し、長崎から中国人が移動し、上海ネットワークを中心として活動する中国商人の勢力が伸びた。そして1870年代には、上海で輸入したイギリス製がそのほとんどを占めていた外国製綿布の神戸での貿易取引を中国商人が独占したとしている。また、

Commercial Report on Hiogo 中の1874年の神戸港での輸入についての報告をとり上げて、中国商人が扱う輸出品の大宗は、いうまでもなく海産物であり、それらは生産と消費が日中を中心とする地域で完結する、いわば東アジア的物産であり、中国商人が日本商人や欧米商人を凌ぐ交易の担い手であったとする。しかしながら第2の範疇に入る域外の物産、すなわち、イギリスを中心とする外国製綿布の神戸への輸入に中国商人の力が大きく働いていた点を指摘している。そしてそのほかの当該期の神戸での貿易取引に関しても、欧米などの外商にとって中国商人は「手ごわい強敵」とされ、イギリスの報告でありながらその中身はイギリス製の金巾(かなきん)を独占的に神戸に輸入してくる中国商人の活躍ぶりを述べたものが多いと書いている。

また、中国商人が神戸へ輸入する金巾が上海で安く購入されたものだとし、それにかんしてイギリス(マンチェスター)から神戸へのイギリス製綿布の輸入を知るために、上海の状況を把握する必要がある、とする。そして海關統計からはそれを把握することは困難であり、古田氏はそこで Commercial Report on Hiogo の神戸への輸入量の数値と North China Herald の再輸出表を使って上海から神戸への外国製綿布の輸入量を検討し、上海から神戸への金巾が神戸への輸入総量の大部分を占めていた、としている(表1 - 1)。

次に上海が輸入綿布の再輸出センターとしての機能を果たした背景には、独特の流通機構の存在があるとし、神戸の中国商人たちはその流通機構にどのように関わっていたかを述べている。

ここでは The North China Herald から、

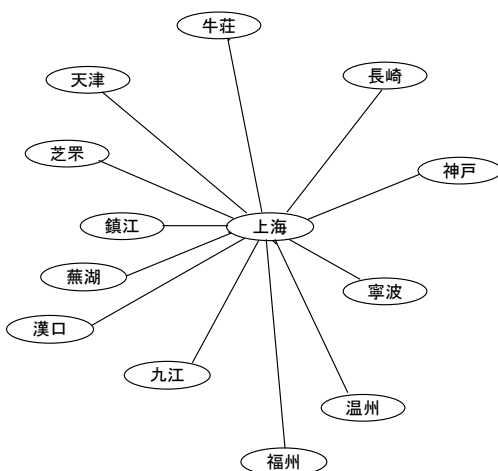


図1 - 1 上海ネットワーク

出典：古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』(p.21)

表1 - 1 生金巾の神戸への輸入量及び上海から
神戸への再輸出量 単位: pieces

年	神戸への輸入量 (A)	上海 神戸再輸出量 (B)	(B)/(A) %
1868	23,294		
1869	29,250		
1870	39,500		
1871	98,350		
1872	190,003		
1873	565,000		
1874	485,407	316,968	
1875	360,358	326,054	90.48
1876	254,865	248,176	97.38
1877	215,890	232,769	
1878	336,698	144,639	

出典: 古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』(p.21)

綿布買い付け商人の動静をみて、漢口ディーラー、天津ディーラー、鎮江ディーラー等が上海綿布市場を牛耳っていたとし、中国各地の内地商人の中には仕入れ地に支店や代理店を持つものもいたとする。しかし通常の商人はそれを持たず、宿泊施設などを利用して注文取りの外交員と接触していたことなどをあげている。当然彼らは市場の動向に目を凝らして、本店に情報を通知することをおこなっており、そのような情報面・コスト面の有利性を生かして中国商人は日本との取引において欧米系の外商よりも廉価で商品を提供できたとし、流通機構の面からも中国商人の欧米系の外商に対しての有利さがあったと指摘している。

また、イギリスからの輸入外商と中国商人の取引形態を、輸入外商と中国商人の間で行われる個別取引 (private sales) と、オークションを行う形態 (public sales) に大別され、神戸向けに綿布を仕入れる中国商人はオークションでの買い付けに専念していたこと、また買い付けの状況によっては、彼らが上海の生金巾相

場を左右していたとみることも可能だとしている。さらに中国商人が日本に再輸出していた金巾は下級品であったこともわかるとし、日本市場は上海に輸入された外国製綿布の下級品のはけ口として大きな比重を占めていたと推察できるとしている。

そして最後に中国商人の力の背景には、団結が見られることは一般的であるが、本章ではそれに加えてネットワークによる取引環境の利用という見方を古田氏は新たに提示している。つまり、上海における商業活動の連携なしに、神戸の輸入貿易における中国商人の優越はありえなかったというよりも、1870年代の神戸への外国製綿布輸入は、上海における再分配の一部であったといった方がよいかもしれないと述べている。上海市場のネットワークは、漢口がだめなら寧波へ、寧波がだめなら神戸というふうに、上海商人はイギリス商人に比べ各地に向けて多くの流通のアウトレットをもっていたのであり、それにくらべるとイギリス綿業資本はどの程度明確に日本市場を見据えて綿布を生産していたのだろうか、と古田氏は述べるのである。

(3) また、古田氏は、上海から長崎を経由して朝鮮へ生金巾が再輸出されていたことについても第3章「上海ネットワークと長崎——朝鮮貿易」の中で触れている。この第3章では、初期の日朝貿易は、地理的な要因もあって長崎を拠点に進められ、朝鮮半島からは海産物や穀物、金地金を輸入し、日本からは主としてイギリス製を中心とした外国製綿布が輸出されていたとする。しかも、朝鮮へ輸出されるイギリス製綿布 (金巾・寒冷紗) の大部分は上海から輸入されたもので、朝鮮から輸入された海産物や金地金は長崎から中国へ再輸出されることが多

かったと述べている。そしてさらに1870年代後半から80年代にかけて進展した朝鮮における開港が、上海ネットワークの態様にどのような変化をもたらしたかについて考察している。

そこでは、この朝鮮貿易に関する日本の統計は、1880年代以降、長崎で積み替えのみに止まっていた。つまり輸出入の取引額ではなく長崎は中国商品の単なる物流面での積み替えの場としてのみ機能していたので、正確な数を把握できず、もっとも主要な部分を構成していた中継貿易の量が捕捉できない、としている。そこで、上海の統計を利用して長崎——朝鮮貿易を検討する必要性を強調し、その結果にもとづいて、1870年代末から生金巾の朝鮮の需要増大をうけて、1887年には最盛期を迎え、長崎を仕向け先として上海から再輸出された生金巾の96～99%は朝鮮向けであったと述べている（表1 - 2）。上海には長崎・朝鮮市場への買い付けにあたる中国商人が存在し、漢口、天津、鎮江など他の再輸出先への輸出动向と関連しながら変動していて、いいかえれば、長崎——朝鮮貿易も上海を中心とした輸入綿布の再輸出ネットワークの一部を形成していたとしている。しかし1880年代末から90年代にかけては上海から仁川へのダイレクトな航路が整備され、長崎を経由した生金巾の朝鮮への輸出は下火になったとする。このことは第4章「仁川貿易をめぐる日中商人と上海ネットワーク」で述べている。この第4章では、朝鮮のあらたな開港場である仁川に焦点を当てて、1890年代初期の朝鮮市場をめぐる日中商人の活動を、上海ネットワークという地域経済のなかで捉え、経済圏としての東アジアという広域経済圏での新たな航路の整備という環境変化と流通ネットワークの変貌について分析を加えている。

表1 - 2 長崎における生金巾の取り扱い量

単位：piece

年	(A)	(B)	(C)	(D) %
1868	31,598			
1869	34,340			
1870	49,367			
1871	55,593			
1872	89,942			
1873	65,538			
1874	72,249	36,355		
1875	41,264	43,883		
1876	28,327	23,690		
1877	32,098	33,530		
1878	49,953	24,900		
1879	126,953			
1880	25,628			
1881	7,889	64,350		
1882	5,505	186,280	180,775	97.0
1883	1,829	126,810	124,981	98.6
1884	2,039	109,300	107,261	98.1
1885	1,269	261,712	260,443	99.5
1886	390	312,358	311,968	99.9
1887	547	339,412	338,865	99.8
1888	735	180,100	179,365	99.6
1889	733	104,089	103,356	99.3
1890	332	94,938	94,606	99.7
1891	3,271	82,550	79,279	96.0
1892	558	54,245	53,687	99.0

(A)：長崎輸入量

(B)：上海から長崎への再輸出品(上海 - 長崎)

(C)：(B) - (A) (上海 - 長崎 - 朝鮮)

(D)：(C)/(B)

出典：古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』（p.73）

古田氏は3章「上海ネットワークと長崎——朝鮮貿易」の5節で日朝貿易の「担い手」についても上海のイギリス系商社「義源洋行」を事例として考察している。この点から朝鮮貿易をみたとき、朝鮮輸入貿易に従事する日本商人と、上海の輸入綿布市場で朝鮮向けの綿布買付けにあたる中国商人とは長崎在留中国商館を仲介にして密接な連携を保っていたとしている。そし

て1887年頃までの朝鮮への綿布輸入は、日本商人の独断場の観を呈してはいたが、それが上海ネットワークの全体像の中では、その末端部に属する流通経路を担っていたにすぎないという構図を改めて確認すべきである、と述べるのである。そして「小括」の部分で、日朝間の二国間の貿易は東アジア域内交易としての内実を併せ持つ形で機能していたとし、日本にとって重要な意味をもった大豆や米、牛皮の朝鮮からの輸入貿易が、その対価の支払いとしてのイギリス製綿布の朝鮮への輸出なしには存在しえなかったとする。そのように鑑みると、日朝間の二国間交易と東アジア域内交易とはいわば上海ネットワークを介して互いに密接な関係を保ちつつ、近代東アジア関係史の重要な次元を構成していたということができると述べている。

上海・神戸間の流通ネットワークだけでなく、その当時の上海ネットワークの全貌を知る手助けとなると思われたので、ネットワークの他の一環を占める上海・長崎・朝鮮についても紹介したが、この古田氏の上海 - 神戸間の1870年代のイギリス綿製品の交易についての見解に対し、高村直助教授は『明治経済史再考』の第1章で、その内容を高く評価されながら、近代神戸貿易史の一助となるべくこの著作の内容について何点かコメントしている。次章では、両教授の「上海ネットワーク」の論議の後者の見解について述べる。

2、高村教授の見解

高村氏は『明治経済史再考』第1章「開港後の神戸貿易と中国商人」(ミネルヴァ書房、2006年)で、『横浜市史』に代表される横浜中

心の近代日本貿易史の研究状況の中で、神戸貿易にスポットを当てた古田氏の著作を紹介している。そして、近代初期の輸入貿易に担い手が常識的に想定されてきた欧米商人、とくにイギリス商人(その当時の輸入品の中心は綿製品であり、イギリスの紡績資本の製品が主流であった)ではなく中国商人であったという刺激的な研究と評価しながらも、いくつかの論点をあげてコメントしている。

古田氏は、神戸を「上海ネットワーク」の視野の中に置くことで、中国商人に掌握された神戸というイメージで輸入貿易を描き出したとし、高村氏はそのような古田説に刺激を受けながらも、日本経済史の側から神戸貿易を実証的に検討し、いくつかの問題を列挙している。

- 1、1870年代における神戸のイギリス輸入生金巾市場は本当に中国商人に独占されていたのか。
- 2、当時の輸入港であった横浜と神戸との生金巾輸入の担い手との比較。もし相違があるとすればその理由は何であったのか。
- 3、続く1880年代における神戸の生金巾市場の担い手はだれであったのか。

第1の問題にこたえるものとして、1870年代の神戸の綿製品輸入は、上海から見た統計から中国商人による独占は古田氏によってはっきりした数字をもって提示された事実であるが、日本側の資料である神戸税関沿革史の記述から察して、開港も間もない神戸港では一般に横浜輸入品の転送、つまり移入が多かったことを高村氏は指摘している(表2-1)。領事報告も同年の貿易総額においてイギリス製金巾移入が多かったとしているので、高村氏は中国商人による輸入の規模は確定できないとする。また、移入は依然として盛んで、その担い手は日本汽船

表2 - 1 神戸の生金巾の輸移入

年次(明治)	輸入量	<大阪>	輸入額	<大阪>	移入量	<大阪>	移入額	<大阪>	移入比(量)	移入比(額)
	反	反	ドル	ドル	反	反	ドル	ドル	%	%
1868(1)	23,294		73,220		94,402		293,060		80.2	88.0
1869(2)	29,250	5,709	87,920	20,147	109,424	8,300	307,674	27,650	78.9	77.8
1870(3)	39,500		114,550		61,140	3,000	177,306	8,700	60.8	60.8
1871(4)	98,350		259,644		29,100	6,500	76,824	17,180	22.8	22.8
1872(5)	190,003		484,506		277,979	1,600	709,946	4,080	59.4	59.4
1877(10)			467,071	5,620			538,339			53.5
1878(11)			803,764	4,685			354,400			30.6
1879(12)			1,053,206				502,800			32.3
1881(14)	313,755				382,991				55.0	
1882(15)	127,290				394,520				75.6	

注：移入比は、輸移入に対する移入の比率。

出典：高村直助『明治経済史再考』（p.8）

による沿岸航路整備に伴って日本商人に代わっていったと指摘している。そして実際には神戸では製品を直接ヨーロッパから輸入したイギリス商人を中心とする欧米商人と、横浜から移入した日本商人と、上海から輸入した中国商人のいわば三つ巴の競争があったと述べている。また移入が輸入の3倍以上であったとし、日本人は神戸よりも横浜に安い市場を見出していたことがわかるとしている。つまり、1870年代 - 80年代初めの領事報告について、中国商人による上海からの輸入に注目すると同時に、横浜からの日本商人による移入にも大きな関心を払っていたとして、「日本の輸入市場についても、同じイギリス製品の市場参入であるものを、移入と輸入とを峻別して移入を無視するのは正しくない」⁶⁾ としている。また古田氏が生金巾の上海からの再輸出表に於いて、「近代経済史を扱う時に暗黙の前提としがちな国家という枠組みを見事に払拭してくれる。国民経済ではかる「貿易」が扱う問題と同時に、地域圏の「交易」ではじめて浮かび上がってくる問題の重要性にも気付かせてくれる」⁷⁾ と主張していることに

ついて、日本の輸入市場についても同じことがいえるはずであり、だからこそ輸入と分けて移入を無視するのはよくない、と高村氏は指摘する。

次に、第2の問題点にこたえるものとして、横浜での70年代における中国商人の生金巾取り扱いが少量（部分的）であったという神戸と横浜の中国商人の関与の差について述べている。70年代の神戸への生金巾輸入は中国商人に独占されていたことは古田氏によって明らかにされたが、当時最大の輸入港であった横浜はどうであったかを考察している。

そこでは、横浜の輸入生金巾の上海分の比重は、部分的にとどまっていた、商館別には大半が欧米系で、中国商人による取扱はわずかにすぎないとしている。後の90年代を見ても、中国商人による取扱はほとんど見られず、このような背景で神戸と横浜で中国商人の関与の差について違いがあったとしてそれはどのような理由によるのか、と高村氏も別途考察の必要ありと述べている。そこでは、十分な解答はできないが、両港の開港時期の約10年というずれが大き

な問題をもっていたのではないかと、としている。ひとつには、神戸と香港やヨーロッパの直行航路の整備が神戸・上海間の整備に比べて遅れていたこともあるが、石井寛治氏などによって指摘されているように1866年の恐慌をなかにはさんで、マセソン商会やデント商会などのイギリスの商業資本が打撃を受け、それに代って中小の手数料商人や中国商人が日本に進出してきたのではないかと高村氏も指摘している⁸⁾。そして手数料商人の台頭の条件として貿易金融を担う銀行の日本進出、汽船会社の定期航路の整備、電信の発達が挙げられるが、高村氏は「ほぼ同じ時期の欧米系中小商社の進出と中国商人の進出とを、類似の条件によるものとして重ね合わせてみることはできないであろうか」とし、「これに加えて中国商人活躍の前提としては後述する点を考慮すれば、上海・神戸間に比して香港ないしヨーロッパとの間の直行航路の未整備、という条件があったといえそうである」⁹⁾と述べている。「後述する点」とは、香港ないしヨーロッパとの直行航路の整備がなされ、輸入の担い手が欧米商人へと代わっていったという点である。

また、古田氏は横浜を神戸と対比して「東の経済」としているが、高村氏は1870年代において神戸は西を向いてアジアに対し、横浜は東を向いて北米・欧州に対するというイメージはもてないとしている。このことについて、横浜の生糸輸出もインド洋を経由したヨーロッパ向けが主であったとされ、生金巾輸入は、上海経由であれ香港経由であれ、西から入ってきており、その意味で基本的には横浜の貿易も西を向いていた、と指摘している。

そして、第3の問題にこたえるものとして、古田氏は70年代の神戸への生金巾輸入が中国商

人によって独占されたことを明らかにされたが、続く80年代はどうであったかについて述べている。

それについて、高村氏は80年代に香港、ヨーロッパからの神戸航路が発達して、欧米商人による神戸への輸入が増加した状況が生まれた、と指摘している。1879 (明治22) 年、三菱会社は神戸経由の横浜・香港間定期航路を開設、1882 (明治25) 年それは神戸・香港航路になったが、外国汽船との競争激化により1884年 (明治27) 年廃止された。これに対して1882年、P&O 汽船会社などの香港航路が神戸に寄港するようになり (郵便輸送)、月2回の香港との貨客輸送とボンベイの定期貨物輸送を行うようになった。また1885年にはフランス郵船の香港・横浜線も神戸に寄港するようになり、このような航路整備の結果、神戸の貿易相手港は上海に対比して香港が首位を占めるようになる (1885年)。このように貿易相手港が上海から香港へ移行し、それと同時に先ほどの製品を神戸へ直接ヨーロッパから香港やシンガポールなどを通じて輸入した欧米商人と、横浜から移入した日本商人と、上海から輸入した中国商人の三つ巴の競争状態において、上海からの輸入と、横浜からの移入は抑えられていった、と高村氏は述べている。上記3者の三つ巴の競争は、次第にイギリスからの「直接的」輸入が勢力を強めてくるのである。これまで上海を経由した航路でイギリス製綿製品は日本へ運ばれたが、イギリスから香港などを經由して日本へ、またイギリス本国からの直輸入も定期航路の整備によって可能になった。生金巾輸入に関しても、上海経由の輸入と横浜からの移入は減少し、地位を下げたとし、80年代後半は香港ないしロンドンからの直輸入が大部分になったとしている (表2 -

表 2 - 2 神戸港への相手港別生金巾輸入

年次	相手港	輸入量	輸入額	港別比
		ヤード	円	%
1883	香 港	262,000	11,948	5.6
	上 海	1,319,065	58,315	27.5
	倫 敦	163,833	7,113	3.4
	合 計	4,461,531	211,800	100.0
1884	香 港	1,723,680	78,193	24.7
	上 海	2,102,388	97,189	30.6
	倫 敦	430,084	20,122	6.3
	合 計	6,880,971	317,172	100.0
1885	香 港	4,168,066	167,295	43.3
	上 海	350,614	16,127	4.2
	倫 敦	589,011	28,113	7.3
	合 計	9,051,532	386,670	100.0
1886	香 港	312,303	14,611	4.8
	上 海	1,095,537	48,301	15.9
	倫 敦	5,334,728	222,128	73.2
	合 計	7,156,878	303,328	100.0
1887	香 港	4,009	281	0.1
	上 海	1,321,898	61,592	11
	倫 敦	11,088,566	449,584	80.2
	合 計	13,477,568	560,715	100.0

出典：高村直助『明治経済史再考』（p.13）

2)。輸入の担い手は欧米商人で、特にイギリス商人の取り扱いが8割を占め、輸入先も上海・ボンベイは少量で、それ以外は全てイギリスからの輸入であった、としている。そしてさらにその後の90年代は香港・ヨーロッパからの直接輸入が多くなり、担い手も欧米商人であって、かつての「商業貴族」と当該期の「中小商社」の取引のあり方も相違していたようで、その貿易は古いタイプの買取商人ではなく委託取引に依存した直輸入に近い性質を持つように変化しつつあった、とする。それは、かつて日本商人が横浜で安価で綿製品を仕入れて、神戸に移入する前提条件となっていた、上海市場とのクリアランスセールやオークション取引の消滅を意

味していたのではないかと指摘する。

3、評価と課題

この「上海ネットワーク」の論議から何を学ぶことができるかを整理し、今後の研究の課題を検討してみたい。まず、古田氏の著作から2つの点が高く評価される。

まずひとつめは、上海ネットワークを検討するに当たり、これまでの研究のように長崎・神戸の側からでなく、その外側からつまりアジア（上海）の側から1870 - 1890年代の日本をみた点である。これは古田氏の著作全体を貫いているひとつのポリシーといってもよいもので、この論文で主に取り上げた第1章「上海ネットワークの中の神戸」にかんしても同様である。第3章「上海ネットワークと長崎——朝鮮貿易」に関しても同様の視点があり、上海から中国商人の手によって長崎を経由して朝鮮へ外国製綿製品が運ばれた経緯を、第1章と同じく、領事報告や上海で発行されていた英字新聞などを駆使して主に中国側の視点から分析している。古田氏は最近のわが国での研究成果を挙げ、日本における中国商人を「アジア交易圏」というシステムの中で大局的に捉えなおした点は評価しているが、その「アジア交易圏」における貿易取引の詳細な実態については明らかにされていないとし、第一章では上海から神戸の方を向いて明治初期の開港場を眺めてみようとした。そうすることで、上海が再輸出ルートで寧波や漢口と繋がっているように、神戸や横浜あるいは長崎と繋がっており、中国国内の開港場と日本国内の開港場が、さらに日本と朝鮮との貿易なども上海ネットワークの中に同時に見えてくる、

としている。

そして2つめの評価は、ネットワークという流通システムの分析視角においてこのテーマに挑んでいることである。古田氏はこの著作全体で、19世紀後半の東アジアに展開した交易と交流の動向とその結合関係を流通ネットワークとして捉え、その構造と変容を考察するとしている。交易と交流を担うヒトとしての「アジアの商人」、とりわけその中核である中国商人のネットワークは、どのような特徴を備えていたのか、仲介や情報という視点からネットワークを考察した場合に、そのネットワークは中国の市場秩序の形成や東アジアにおける経済秩序の維持にどのような役割を果たしたのか、つまり従来からの「ヨーロッパの negative history」としてのアジアではなく、「アジアの positive history」のなかに中国商人のネットワークの独自の役割を位置づけたのである。とくに注目されるのは、上海・長崎・朝鮮の流通ネットワークの分析のなかで、上海から朝鮮への綿布輸出はフォーマルな取引関係を反映した貿易取引ではなく、上海との取引のうちの単なる物流面を担当したにすぎないことを、ヒト・モノ・情報のネットワークの分析結果として明らかにしている点である。

また、「ネットワーク」という言葉がこの著作には頻繁に出てくるが、古田氏が19世紀後半の上海が新しい開港場間を結ぶネットワーク・センターとして物資の集配機能を強めていたとして、上海を中心としたヒト・モノ・情報のネットワークを考察していることはこれまで述べた。松野周治氏はこの著作の「ネットワーク」という用語の含意について、杉山伸也、リンダ・グロブ編『近代アジアの流通ネットワーク』（創文社、1999年）では「流通ネットワーク」

に加えて、「貿易」、「交易」、「決済」、「経済」、「商業」、「交通」、「輸送」、「情報」、「金融」、「公的」、「個人的」、「非公式」等などさまざまな接頭語（及びその組み合わせ）がついたネットワークが述べられている¹⁰⁾が、「上海を中心とした交易と交流」である「上海ネットワーク」の内容には上記の諸ネットワーク全体が含まれているのか、それとも一部なのか、明確にする必要がある、としている¹¹⁾。

また、古田氏は近年の論文で、中国商人と情報に関しても書かれている。そこでは中国商人の「客幫ネットワーク」を情報が流れる制度として、商人たちの自分と協力者の個別的なネットワークの中をモノやカネ、そしてヒトが流れ、それらすべてに付随して情報が流れ、このネットワークがその提供する情報の質を取引に先立って事前に保証する装置として機能していた、と述べている¹²⁾。

最後に、両教授からは多くのご教示をいただくことができたが、しかし、今後残された課題もいくつか見出されるように思われる。ここでは大きく2つの点を指摘しておきたい。それはまず流通ネットワークのパターンがその後どのように変化していったのかという点で、上海ネットワークは決して固定されたままではなく、環境条件の変化とともに変わってくることである。国際流通のパターンと戦略上の基本政策において、流通経路の長さなどは選好ベースよりも環境ベースで決定されることが多いといわれている¹³⁾。

その一例として、まずこの著作の第4章「仁川貿易をめぐる日中商人と上海ネットワーク」に述べられているように上海・長崎・朝鮮ルートから、ダイレクトな上海・仁川ルートへの変化があげられる。前述したように、上海・長崎・

朝鮮ルートでは、上海から長崎を経由地として朝鮮ヘイギリス製綿製品が再輸出されていた。このときの朝鮮航路は、日本郵船が独占している状態であった。しかしその後、1888年3月の上海から仁川にいたる蒸気船の定期航路が開設され、日本郵船の対外航路中最大の航路であった朝鮮航路の独占状態が破られることになる。これに乗じて中国商人もこの航路で台頭してくるようになり、1890年代に入ると、上海 - 長崎 - 朝鮮ルートの長崎経由の再輸出は低下の一途を辿ることになる。また、2つめの例として日本紡績資本の朝鮮への進出がある。日清・日露戦争により朝鮮の日本からの輸入は金額で約10倍以上に拡大し、日本産品が9割をこえ、綿布・綿糸で4割を占めた。また、朝鮮との取引に従事する日本商人の中に大阪紡績や三重紡績の朝鮮における特約販売店となる有力な者もいて、京城や仁川などに進出した。彼らは徐々に朝鮮各地の中国商人を圧倒するようになる¹⁴⁾。これらはネットワークの外的条件の変化により流通ネットワークのあり方が大きく変わっていく事例である。

2つめの課題は、高村氏の問題提起に関わる点であり、それはより基本的にはイギリスの紡績産業資本と商業資本（J・マセソン商会など）のアジア・日本への進出動向の研究とその推移の解明に関する石井寛治『近代日本とイギリス資本——ジャーディン・マセソン商会の研究を中心に』などの先行研究に依存する面が大きい。それはイギリス紡績資本が恐慌による商業資本（商業貴族）の破綻から学んで、日本の関係するアジア交易圏の流通ネットワークのパターンが、オークション・クリアランスなどを介してのいわば競争的連携（イギリス - 上海 - 日本）から、次第に直接的管理のパターン（イギリス

本国のメーカー・商社 - その代理店 - 日本）へと変わったことである¹⁵⁾。それは、簡単にいえば、日本の綿製品輸入貿易のネットワークが、上海中心からイギリス本国の直接的管理による貿易ネットワーク中心に徐々に変化したというものである。

この英本国による直接的管理について具体的に見てみよう¹⁶⁾。マンチェスターの紡績業者（製造メーカー）を例にとるならば、横浜の日本人買取商人から注文がJ・マセソン商会など香港やシンガポールに本店を置く巨大商社の日本支店へ伝えられ、その日本支店が委託取引（代理店・手数料商人）で対応する。この注文（情報）の流れは香港やシンガポールの本店に伝えられ、在庫の取り崩しか現地での調達あるいはイギリス本国からの商品供給がこれに続く。西村閑也氏は前掲の論文の中で、この時期に香港に本店を置いていた香港上海銀行が、香港に本店を置くことによる現地（例えば中国や日本）の情報への対応の有利性を強調しているが¹⁷⁾、これはJ・マセソン商会などと共通した点であろう。

ところで、横浜などの日本人買取商は現金での支払いが原則であり、進出外商の日本支店（代理店）は、受け取り代金から関税・諸経費および手数料を差し引いた分を進出している外国銀行の手形を買ってロンドンに送金する（図3 - 1を参照）。西村氏も上記の香港上海銀行の活動の記述のなかで、イギリスの輸出商がアジア諸国の輸入商のための輸入金融の手段として、利付手形という特殊な手形が売却されていたと述べている。これは1870年代後半から1880年代以降の状況である。このような英本国による直接的管理のネットワークを生み出した環境的・技術的要因として、貿易金融を担う欧米の

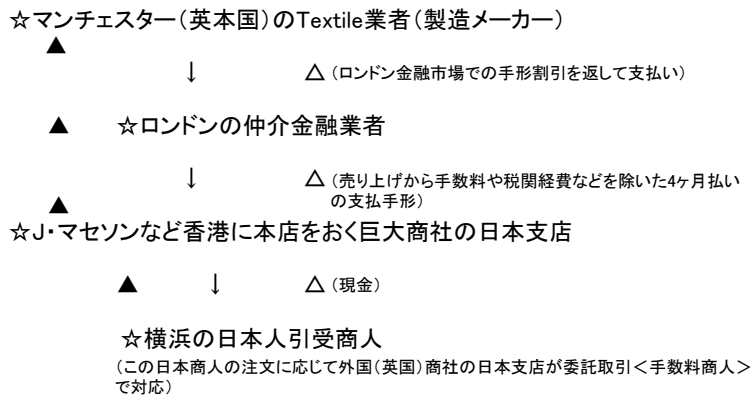


図3 - 1 英本国による直接的管理パターン (Textile 業者の場合)

注文の流れ(情報) 商品の流れ(モノ) 支払の流れ(カネ)

注: 石井寛治『近代日本とイギリス資本』の記述を参考にした (pp.201~202)

銀行の日本への進出、香港経由の欧州からの定期直行便の整備、電信の発達などの環境条件の変化が大きい。とくにこの時期になると、イギリスではロンドンの手形割引市場を頂点とするピラミッド型の国際的通貨信用体制が構築されてきており、国際的な手形割引業務の著しい拡張と、その反面としての国内手形割引業務の減退が生じているのである¹⁸⁾。

しかも同時に、このような条件を反映した上でのイギリス紡績資本のグローバルな流通管理体制の強化という主体的条件、つまり今日の言葉でいえば、マーケティング・チャネル管理体制の強化という流れと結びついている、と思われるのである。しかし、この点に関してはまだまだ実証と検討が必要である。

おわりに

古田・高村両教授の見解から、19世紀後半に東アジア交易圏における欧州との交易の結節点

であった「上海ネットワーク」について考察し、その論議を検証した。これらの点に関しては、高村氏をはじめ多くの経済史の研究者によって議論されてきている。その中には本文で記したような「上海ネットワーク」の「ネットワーク」の内容に関するもの、またこのネットワークがどの程度「東アジア貿易」を秩序付けていたか、またそれは歴史的にみて固定的で普遍的なものといえるかなど、総体としての「上海ネットワーク」の把握、さらに上海だけでなく近隣(中国の諸開港場、日本、朝鮮など)の貿易相手先からの視点の必要性など今後の課題も多い。本稿では、両教授の論議から、19世紀後半の上海を中心とした流通ネットワークについて、英国の綿製品流通の1870年代までの上海のクリアランス市場やオークション取引を介して競争的連携から、80年代後半以降の直接的管理のパターンへの変化が、今日の視点で現代の流通管理体制を考察する上でなにか示唆を与えるものと捉えた。しかし、詳細な実証と検討については今後の課題としたい。

また、上海ネットワークをみていくことによって、東アジアの国境と交易圏のズレが認識され、そこに新たな地域圏の形成が見出され、さらに開港期から20世紀までの長期的な歴史的変動の中で、「上海ネットワーク」が急成長をとげるイギリスや日本の紡績産業資本との世界的規模での競争のなかでどのような位置づけられていくのか、今後さらに検証してゆく必要があるようである。

註

- 1) 菱谷武平『長崎外国人居留地の研究』（九州大学出版会、1988年）他
- 2) 古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』p.13
- 3) 浜下武志『中国近代経済史研究——清末海關財政と開港場市場圏』（汲古書院、1989年）他
- 4) 杉山伸也「国際環境と外国貿易」（梅村又次・山本有造編『日本経済史3 開港と維新』（岩波書店、1989年）他
- 5) 杉原薫「アジア間貿易の形成と構造」（『社会経済史学』第51巻1号、1985年4月）他
- 6) 高村直助『明治経済史再考』p.8
- 7) 同上
- 8) 同上 p.11
- 9) 同上
- 10) 杉山伸也、リンダ・グローブ編『近代アジアの流通ネットワーク』p.6
- 11) 松野周治 書評「古田和子著『上海ネットワークと近代東アジア』（東京大学出版会、2000年）」（『歴史と経済』46 1、2003年）
- 12) 古田和子「経済史における情報と制度——

中国商人と情報」（『社会経済史学』69 4、2003年）

- 13) カトーラノヘス、角松正雄他訳『国際マーケティング管理』（ミネルヴァ書房、1979年）p.155
- 14) 杉山、リンダ前掲書 pp.59 60
- 15) 高村前掲書 pp.11 14
- 16) 石井寛治『近代日本とイギリス資本』pp.201～202
- 17) 西村閑也「香港上海銀行、1870 1913」（『金融構造研究』第29号 p.28）
- 18) 都野尚典「国際金融と国際通貨機構」（竹村脩一編『金融経済論』有斐閣、1968年、p.199）。W.T.C.キング、藤沢正也訳『ロンドン割引市場史』（日本経済評論社、1978年、p.325）

参考文献

- 先行研究として本文中で紹介したもののほか、色川大吉『日本の歴史21 近代国家の出発』（中公文庫、1974年）
- 加藤祐三『東アジアの近代 ビジュアル版世界の歴史17』（講談社、1985年）
- 浜下武志・川勝平太編『アジア交易圏と日本工業化1500 1900』（リブレポート、1991年）
- 原田敬一『日清・日露戦争 シリーズ日本近現代史3』（岩波新書、2007年）
- 毛里和子・森川裕二編『東アジア共同体の構築 4 図説 ネットワーク解析』（岩波書店、2006年）